

書評

Elizabeth Grosz

Space, Time, and Perversion: Essays on the Politics of Bodies

Routledge、1995、284 頁

藤原茉唯*

1. はじめに

Space, Time, Perversion-Essays on the Politics of Bodies は、1995 年に出版された Elizabeth Grosz による論文集である。著者の Grosz はシドニー工科大学で哲学の博士号を取得し、現在はデューク大学で教鞭をとっている。彼女は身体を重視するフェミニズム (corporeal feminism) の第一人者として知られており、代表的な著作として本書の他に *Volatile Bodies: Toward a Corporeal Feminism* (1994)、*Jacques Lacan: A feminist introduction* (1990) などがある。

本書が出版されてからすでに 25 年が経過しているが、その意義はいまだ揺るぎない。2000 年代に入る頃から身体や物質性に注目するフェミニズムが盛んになりはじめたが、これは身体や物質性を話題にすることを本質主義への逆戻りとして忌避し、言説分析のみにとどまっていた従来のフェミニズムに対する自己反省であった。material feminism と呼ばれているこの流れは現在でも拡大を続けている。STS に由来するアクターネットワークセオリーから影響を受けたもの、ドゥルーズ＝ガタリの影響を受けたもの、エピジェネティクスや脳神経科学など最新の科学研究の成果を取り入れたものなどそのバリエーションには枚挙に暇がなく、一つの領域として言い表すことが躊躇われるほどである。さて、Grosz の名は material feminism を紹介する文献で必ずといっていいほど触れられるが、それは彼女が身体性 (corporeality) を重視する corporeal feminism の黎明期を担った思想家の一人であること、それがのちに身体以外の物質も含む広い意味での material feminism の開花に寄与したからだといえる。その点で Grosz の 1995 年までの足跡が 13 の論文という形で収められた本書の重要性は現在でも健在である。

本書は 13 の論文がテーマごとに 3 部に分けられている。第 1 部は Bodies

* 大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻共生学系 博士前期課程 1 年

and Knowledge、第2部は Space, Time and Bodies、第3部は Perverse Desire と題され、各部で論文が古い方から順に並べられている。Grosz 自身も冒頭で述べているとおり、本書の論文に書かれていることは支配的な諸々の前提を疑うことにあり、確固とした新しい理論やポジションを確立しようという試みではない。とはいえ、本書からは Elizabeth Grosz という人物がどのような学問や思想体系から影響を受けてきたのか、どのような筋道で思考を発展させてきたのかを窺い知ることができる。

2. 本書の内容

第1部 Bodies and Knowledge では、性的な特殊性と知識 (knowledge) の関係が問われる。ここで批判されるのは、知識は中立的、客観的なものであるという暗黙の前提、精神や理性を身体の上位に置こうとする思考、知の主体がもつ身体の違い (bodily difference) を無視して、知識に浸透している性的特殊性を抹消しようとする傾向である。Grosz はフーコーやニーチェ、ラカンやフロイトなどの思想家の名前を挙げながら、知識の生産は純粋な精神的な営みではなく、身体的な行為であると述べる。ゆえに身体の違いは知識にもその痕跡を残すこととなり、知識は決して透明で客観的なものにはならない。このような考え方は知識を常に部分的なものとして考えるような、男根ロゴス主義と一線を画する思考を開く。

第2部 Space, Time and Bodies では空間とそれに関係する建築、都市計画、地理などのアートが、Grosz の重視する主体性 (subjectivity)、身体、思考と関連づけて分析される。ここでは、Grosz が身体性 (corporeality) をどのように考えているかが明らかとなる。Grosz にとって身体は、文化からの書き込みを待つだけの静的で固定的な無垢の自然ではなく、周囲の環境と相互作用を繰り返しながら変化しつつ、構成されていくものである。そのため、空間概念の文化的な捉えられ方は主体性や身体性の構成に多大な影響を及ぼす。Grosz は、女性が自律性を奪われ、「欠如」や「去勢」といったネガティブなイメージで誤って表象されている背景には、プラトンに始まり現在まで残っている男性中心的な空間概念の影響があると考える。

第3部 Perverse Desire では、一般的なセクシュアリティや快楽、欲望の表

象から除外されてきた倒錯した欲望を扱う論文が集められている。ここでは大きく分けて2つのテーマが扱われる。第一に、その規範性と明らかにヘテロセクシズム的な前提のために乗り越えられるべきものとして考えられてきた精神分析の言説を、フェミニズムやレズビアニズムが欲望の理論としてどのように批判しつつ活用していくのかという問いである。第二に、西洋哲学史で主流の欠如モデルとは異なるポジティブな欲望の理論に基づいて、身体性や主体性についてどのような新たな視点を獲得できるかという問いである。後者について、Grosz はドゥルーズの思想から多くの示唆を受けている。Grosz によればアイデンティティやその欲望とは「何か」を問うような従来の潜在性 (latency) や深さ (depth) の思考ではなく、強度 (intensity) としての欲望と、表面 (surface) に着目する観点こそが、欲望を欲望それ自体として捉えるために必要とされるものである。

3. 論評 1—関心の変遷と「性的差異」

本書を読むと、Grosz の関心がどのような軌跡を描いてきたかがよくわかる。この論文に収められている中で最も古い初出が 1988 年の第 5 論文では、フロイト・ラカンの精神分析に主眼が置かれている。一方で比較的新しい 1994 年から 1995 年に書かれたもののうち、第 8 論文と第 11、12、13 論文にはドゥルーズ＝ガタリからの影響が見られる⁽¹⁾。「フロイトからドゥルーズへ」⁽²⁾という遷移は Grosz 自身も認めるところである。

そのような関心の変遷の一方で、性的差異を強調するイリガライの思想の影響が初期から 1995 年時点の最新の論考に至るまで一貫していることは、他の corporeal feminist を名乗る論者の中でも特異な点であるといえよう。corporeal feminist がドゥルーズを参照することは一般的だが、その場合性的差異は他の無数の差異の一つとして考えられ、特権的な意味をもつことはない。ドゥルーズを援用しながら性的差異を強調する Grosz は異端と言っても過言ではなく、実際、Abigail Bray と Claire Colebrook は Grosz(1994)が普遍的な性的差異の二項対立を論じるにあたってドゥルーズを用いることを批判している⁽³⁾。また、ダーウィンの進化論を非直線的な、非目的論的なものとして読み直そうとする Grosz が性的差異を強調していることは、非直線

的な進化に制限を加える態度であり、矛盾しているという指摘もある⁽⁴⁾。

Grosz が性的差異について論じる際、その核にあるのは男性と女性の身体的な差異である。その理由は Grosz が身体性をどのように考えているかを見れば明らかである。Grosz が試みているのは精神 (mind) / 身体 (body)、文化 / 自然の順位づけを含んだ二項対立を見直すことである。Grosz にとって、精神と身体は別々のものではなく、複雑な相互作用の中で発達していくものであり、身体は受動的な物質ではない。身体は文化 (つまり精神) によって書き込みを受けるだけの静的な物質ではなく、精神や自我の形成に決定的な役割を及ぼす能動的な役割をも担うのである。故に、Grosz にとっては身体的な差異はただ物質的な差異であるのみならず、精神や自我形成の側にも影響を及ぼす決定的な要素であるということになる。また、第2論文で述べられているように、知識の生産が身体的な行為であると見做される以上、男女の性的な差異をもつ身体から生み出される知識もまた性的な特殊性を帯びたものとなる。本書に収録された論文でも、性的差異の重要性に言及する場面はいくつも見られる⁽⁵⁾。

とはいえ、身体的差異には性的差異の他にも人種、年齢、障害の有無などがありうる。Grosz の考え方に照らし合わせてみれば、それらの差異もまた精神や自我の領域にまで影響を及ぼすはずである。なぜ、性的差異だけが特権視されるのか。本書第2論文で Grosz は月経、妊娠、出産など、男女の生物学的な過程の差異に言及し、この差異はあらゆる文化において示されるものであると述べている。さらに、第3論文で平等主義のフェミニズム (egalitarian feminism) を批判する文脈で、女性が本来男性と同じだけの能力と可能性を持っていると主張するだけでは、性的な、あるいはリプロダクティブなレベルでの平等は叶わない、とも述べている。*Volatile Bodies* でも同様に生物学的機能についての言及があることから、Grosz が男女の性的差異の普遍性について語る時、それは生殖に資する生物学的機能の差異の普遍性を語っていると考えられる。

性的差異について語る文脈で生物学的機能の差異を強調することは、当ても現在も変わらずかなり挑戦的な姿勢である。性差を文化的な異性愛主義の法によって作りあげられたものとして考える社会構築主義はフェミニズムの大前提であり、Grosz のように解剖学的な性別を前提として議論を進めることはバックラッシュ的ですからある。さらに最近の文脈では、解剖学的

性を根拠として女性を語ることはトランス排除の姿勢として攻撃を受けることもあり、解剖学的性差に言及することをタブー視する傾向はより強くなっている。前述したように、身体を重視する corporeal feminist の中でさえ、身体的な性差を前提とする姿勢は批判の対象と考えられるのが一般的である。この点で Grosz の立ち位置は特殊である。

上記の内容と関連して、Grosz の身体性と性的差異について考えるとき次のような疑問は必至だろう。Grosz はドゥルーズを援用して、身体の「限らない開かれ」(open-endedness) や生成変化を来たるべき身体性の概念として肯定的している。果たして、このような身体性に対しても性的差異は限界として立ち足るのだろうか。Grosz は *Volatile Bodies* において、生殖に関連する男女の生物学的差異が普遍的なものだと同時に「性的差異は存在論的なものではない」⁽⁶⁾と述べており、その立場は曖昧なままにとどまる。本書の第 13 論文が「クィアな主体性についての再考」と題されているにもかかわらず同性愛に対する言及のみにとどまっていることは、Grosz のこの問題に対する戸惑いを示しているようで示唆的である。

4. 論評 2—他分野との連携、関係の再構築

本書に収録された論文には、Grosz の幅広い分野に対する関心や、反フェミニズムとみなされてきた言説に対する果敢な取り組みが見られる。関心の広さという点では、建築、フェミニズム、身体と哲学の問題を一挙に結びつけた第 7 論文が斬新である。のちに発表された著作 *Chaos, Territory, Art: Deleuze and the Framing of the Earth* (2008) はおそらくこの頃の関心を、とりわけ建築とドゥルーズを実験的に結びつけようとした第 8 論文の内容を発展させたものだと考えられる。また、第 12 論文では昆虫の擬態やメスカマキリの交尾の際の共食い行動の研究が、快樂とリビドー、欲望について語る文脈で言及されている。これは 後年の Grosz の自然科学言説へのコミットメントや、性淘汰を芸術の起源と結びつけて考える思考の始まりと考えられる。

反フェミニズム的(とみなされている)諸言説に関してはどうだろうか。第 2 論文では知識と身体の結びつきを提示した思想家としてニーチェ、フ

ロイト、ラカン、フーコーの名が挙げられる。Grosz は彼らに向けられているフェミニストからの批判について認めながらも、彼らが作り上げた身体性についての枠組み自体は評価し、それをフェミニズムに応用しようとする。第4論文はフェミニズムの根本的前提を掘り崩してしまうとして敵対視されてきたデリダの脱構築を、フェミニズムにとって有用になるように利用できるのではないかと、という提言として読むことができる。なかでも特に目につくのは、Grosz の精神分析に対する両義的態度だ。Grosz は精神分析が明らかに問題のある前提のもとに成立していることは認めたくなくて、精神分析の全てを無用のものとして葬り去ることは決してしない(第10論文)。Grosz はラカンの鏡像段階論、フロイトの身体自我、リビドー概念など、精神分析の有用な概念は積極的に利用し、今までとは違う新しい読みや解釈が可能なものについてはそうすべきだという態度をとる。本書の第3論文には Grosz がなぜこのような姿勢をとるのか、その根拠となるような考え方が示されている。我々が依然として男性優位の社会に生きており、これまでもその枠組みが主流であった以上、あらゆる意味で家父長制、男根ロゴス中心主義から逃れた透明な理論を追求することはできない。そのため、既存の枠組みの内部で苦闘を続け、新しい読みを切り開いていくことがフェミニズムにできることなのである。

男性中心主義に染まった言説を外部から批評しているだけでは十分でないという考えは、Grosz だけのものではない。身体の問題を忌避してきたフェミニズムが既存言説(特に科学言説)に対する批評という受動的な役割しか果たさず、生産的なフェミニズムの理論化を妨げてきたという反省のもとで2000年頃から盛んになったのが、これまで忌避されてきた自然科学の成果と積極的に手を結び、身体と物質性の問題をフェミニズムに取り込もうとした *material feminism* である。この分野の代表的書籍とされる *Material Feminisms* に収録されている第1論文はダーウィニズムのフェミニストの再解釈を試みた Grosz の論文である。ここからも、Grosz が *material feminism* に与えている影響の大きさを推し量ることができる。

5. おわりに

本論では以下の2つの点を取り上げた。1点目は Grosz の議論の重心が精神分析からドゥルーズ＝ガタリの方へと移動していること、それに対して「性的差異」を重視する姿勢が初期から一貫しているということ。2点目は彼女の1995年時点での考えや態度が、どのようにその後の彼女の思索の発展に繋がっていったのかである。corporeal feminism、material feminism の開花に大きく貢献した Grosz の思考を辿ることは、今後これらの領域で研究をするにあたって重要な意味を持つだろう。

本書の読解を通して、身体的性差を重視し、主流の社会構築主義に対してある意味で挑戦を突きつける Grosz の姿勢が明らかとなったが、これは特筆すべき点であると筆者は考える。社会構築主義がフェミニズムの大きな成果であることは明らかである。その一方で、生物学的機能という点での身体的な男女の差異が言説や文化によって生み出された差異に縮減されてしまうという点は、現実には女性がその身体的特性を根拠として被る種々の困難に理論が向き合うことを難しくもさせる。Grosz は身体を純粋な自然として捉えているわけではなく、変質を被りうると考えている点で、明らかに本質主義者ではない。身体の構築性と、構築では説明できない点の両義性に向き合っているという点で、Grosz の思考は現在のフェミニズムにとって非常に重要であるといえる。

注

- (1) とはいえ、Grosz が精神分析を放棄したというわけでは全くない。本書の第9章と第10章では精神分析とフェミニズム、あるいはレズビアニズムがどのように関係を引き直せるかが模索されている。
- (2) Grosz (1995) :3
- (3) Bray and Colebrook 1998:60.
- (4) Wirth-Cauchon, Janet. 2016. *Nonlinear Evolution, Sexual Difference, and the Ontological Turn: Elizabeth Grosz's Reading of Darwin. Mattering: Feminism, Science, and Materialism.* NYU Press.
- (5) 精神と身体との相互作用という考え方から性的差異が重視されているというわけではない。普遍性を語る言説からは常に女性が排除されてきたという歴史的事情も背景にある。
- (6) Grosz (1994) p.209

参考文献

- Alaimo, Stacy and Heckman, Susan (eds.). 2008. *Material Feminisms*. Bloomington: Indiana University Press.
- Bray, Abigail and Colebrook, Claire. 1998. The haunted flesh: Corporeal feminism and the politics of (dis)embodiment. *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 24(1): 35–67.
- Grosz, Elizabeth. 1994. *Volatile Bodies: Toward a Corporeal Feminism*. London: Routledge.
- Wirth-Cauchon, Janet. 2016. Nonlinear Evolution, Sexual Difference, and the Ontological Turn: Elizabeth Grosz's Reading of Darwin. *Mattering: Feminism, Science, and Materialism*. New York: NYU Press.
- グロス、エリザベス 2020『カオス・領土・芸術 ドゥルーズと大地のフレーミング』
檜垣立哉監訳 小倉拓也 佐古仁志 瀧本裕美子訳、東京：法政大学出版局。